

# 百人一首のフランス語訳における 夜明けの表現

—「有明」「暁」「朝ぼらけ」—

飯塚ひろみ

## 1. 考察対象とキーワード

本稿では、「有明」「暁」「朝ぼらけ」を含む百人一首歌を対象として、日本における解釈上の問題点等を踏まえつつ、フランス語訳（以下「仏訳」）における表現方法を考察する<sup>1)</sup>。対象とする歌の仏訳は、Revon 訳<sup>2)</sup>、Renondeau 訳<sup>3)</sup>、Nakamura et Ceccatty 訳<sup>4)</sup>、Sieffert 訳<sup>5)</sup>の4文献から抽出することとする。ただし、Renondeau 訳については該当歌の訳がない場合がある。

対象歌を掲出する。数字は百人一首における歌番号、下線部が各歌のキーワードである。

- 21 今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな  
30 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし  
31 朝ぼらけ 有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪  
52 明けぬれば暮るるものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな  
64 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木  
81 ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる

仏訳は次節以降に個別に見ていくが、「有明」「暁」「朝ぼらけ」の仏訳をさらに日本語に翻訳すれば、総じて「夜明け」となる。フランス語の「夜明け」にも様々な表現があり、今回の対象歌の訳として多用されているのは「l'aube」「l'aurore」「le point du jour」である。これらの違いをフランスの辞典<sup>6)</sup>に則して整理しておこう。

「aube」は「Première lueur du soleil levant qui commence à blanchir l'horizen」

百人一首のフランス語訳における夜明けの表現

で、太陽が昇る際の最初の光と説明されているが、それはまだ日の出ではなく、地平線を白くする程度のほのかなものである。「aurore」は「Lueur brillante et rosée qui suit l'aube et précède de lever du soleil」で、「aube」より後で太陽が昇るより前、光が薔薇色（桃色の意も）に輝く時とある。

したがって、時間帯で示せば「aube」→「aurore」、色で言えば「aube」は白（blanchir）、「aurore」は桃色から薔薇色（rosée）であり、明暗をつけるなら「aube」<「aurore」となる。

「point du jour」は「le moment où le jour pointe」で日が出る瞬間とある。ただし、「aube」の同義語としても記載されており、また「Au chat du coq」（鶏鳴の頃）と同義ともあり、「jour」が「日の光」の意を持つ語ではあるものの、必ずしも「（auroreの後）太陽が姿を見せた瞬間」とは固定できないようである。人により、あるいは状況により「point du jour」をどの点と捉えるかが変わってきそうだ。

以上を踏まえ、対象歌6首の考察に移る。

## 2. 恋の歌における「夜明け」

### 2-1. 今来むといひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな（21番歌）

出典は『古今集』恋四、題知らず、素性法師の歌であるが、男性である作者が女性の立場になって詠んだとされている。歌の解釈の問題としては、数か月待ち明かして九月になってしまったという「月來說」と、九月のある一夜を待ち明かしたとする「一夜説」の対立が挙げられる<sup>7)</sup>。翻訳に際しては「夜が長い」意が含まれる旧暦の九月の呼称「長月」をどう表現するかもポイントとなろう。

仏 訳	今来む	長 月	有明の月
(1) Revon 訳 Seulement parce qu'elle m'avait dit : 《Je reviens tout de suite》. Je l'ai attendue hélas! jusqu'à l'apparition De la lune de l'aube Du mois aux longues nuits!	彼女	長い夜々の月 (暦)	夜明けの月
(2) Renondeau 訳 《Je viens tout de suite》 M'avait-elle dit, Mais jusqu'à l'aurore D'une longue nuit du neuvième mois En vain je l'ai attendue.	彼女	9 番目の月 (暦)	夜明け
(3) Nakamura et Ceccatty 訳 Il m'a suffi d'entendre 《je viens》 pour attendre déjà La lune de l'aurore la longue lune de l'automne.	不明	秋の長い月	夜明けの月
(4) Sieffert 訳 Sur l'heure viendrai m'avait-il dit seulement et j'ai attendu tant que de la lune-longue s'est levée lune de l'aube	彼	長い月	夜明けの月

(1) は、「ただ彼女が私に言った (Seulement parce qu'elle m'avait dit) / 《私はすぐに戻ります》 (Je reviens tout de suite) (と) / 私は待った (Je l'ai attendue) / ああ、夜明けの月の出現まで (hélas! jusqu'à l'apparition de la lune de l'aube) / 長い夜々を持つ月の (du mois aux longues nuits)」と、詠み手を男性として訳している。「月」については、天体としての月 (la lune) と暦の月 (mois) を使い分けている。「長い夜」が複数形 (aux longues nuits) であるが、これは「du mois」(単数形) の説明であるため数か月を待ち明かすとする月来説は否定され、「l'apparition de la lune de l'aube」(有明の月の出現) の単数表現により一夜説と捉えられよう。「Je l'ai attendue hélas! jusqu'à l'apparition」(出現まで待った) は、原歌の「待ち出でつるかな」に忠実な表現である。

(2) も詠み手が男性となっている。「《私はすぐに行きます》 (Je viens tout de suite) / (と) 彼女が私に言った (M'avait-elle dit) / けれども 9 番目の月の長い夜の夜明けまで (Mais jusqu'à l'aurore d'une longue nuit du neuvième mois) / む

なしく私は彼女を待った (En vain je l'ai attendue)』で、「長月」は「9 番目の月」(neuvième mois=9 月)であり、「長い夜」(une longue nuit)が単数形であるから一夜説となる。「有明」は「l'aurore」なので、「l'aube」とする(1)よりも後の時間帯となる。

(3)は、「私は来る」(je viens)<sup>8)</sup>の主語が曖昧である(冒頭の「Il」は非人称主語)。訳は「それは私には十分だった (Il m'a suffi) / 《私は来ます》ということを知りだけで (d'entendre 《je viens》) / 待つためにはもう (pour attendre déjà) / 夜明けの月 (La lune de l'aurore) (を) / 秋の長い月 (la longue lune de l'automne) (を)」である。「長月」を「la longue lune」(長い月)と直訳しているため、三日月のような形状の月が想起されてしまい、「夜が長い」ことを読み取ることはできない。ただし、「長い月」が長い時間の概念の視覚化(掛詞の変形)であると哲学的に捉えることは可能であろう。「夜明けの月」(La lune de l'aurore)も「秋の長い月」(la longue lune de l'automne)も単数なので一夜説である。「有明」は(2)同様に「l'aurore」である。

(4)は詠み手を女性としている。訳は「即刻行くつもりです (Sur l'heure viendrai) / (と) 彼がただ私に言った (m'avait-il dit seulement) / そして私はとても待ったので (et j'ai attend tant que) / 長い月の (de la lune-longue) / 夜明けの月が昇ったのだ (s'est levée lune de l'aube)」である。「長い月」は(3)に似ているが「la lune-longue」と「-」でつなぐことで固有名詞化を試みたと考えられる。「有明」は「l'aube」である。「有明の月が昇った」としている点、原歌に則した訳といえよう。「de la lune-longue s'est levée lune de l'aube」という単数表現により一夜説と捉えられる。

4種の仏訳のうち、Revon 訳と Renondeau 訳がこの歌を男性の立場で訳しているのは、作者の性別に引きずられたものであろう。「一夜説 / 月來說」については、総じて一夜説と捉えられる。「長月」については、暦の月 (mois) を用いるものとそうでないものに分かれた。Revon 訳及び Sieffert 訳は残りの二者よりも相対的に早い時間 (l'aube) であり、それは「月が出る」頃である。

## 2-2. 有明のつれなく見えし別れより暁ばかり憂きものはなし (30 番歌)

出典は『古今集』恋三、題知らず、壬生忠岑の歌である。この歌の解釈につい

では ①「つれなく見えし」が月の様子なのか女の様子なのか、あるいは両方か、②女と逢った後の別れを詠んだものか、それとも逢えないままに帰ってきた歌か、という問題がある<sup>9)</sup>。

仏 訳	つれなく見えし	有明 (の月)	暁
(1) Revon 訳 Depuis que j'ai quitté Celle qui paraissait glaciale Comme l'aube qu'éclaire encore la lune, Il n'y a pas pour moi de chose plus triste Que le point du jour !	女 (と月)	月はまだ照らす 夜明け	夜明け
(2) Renondeau 訳 Depuis notre séparation Où elle me montra un visage Froid comme la lune à l'aube, Rien ne me semble aussi triste Que le petit matin.	女 (と月)	夜明けの月	朝早く
(3) Nakamura et Ceccatty 訳 La lune restée en plein jour dans le ciel est impitoyable depuis Ma rupture, que l'aube est amère!	月	昼に残る月	夜明け
(4) Sieffert 訳 Depuis que sous l'œil froid de la lune de l'aube je vous ai quittée je ne sais rien de cruel autant que le point du jour	月	夜明けの月	夜明け

(1) は、「私が離れて以来 (Depuis que j'ai quitté) / 月がまだ照らす夜明けのように冷たく見えた彼女と (Celle qui paraissait glaciale comme l'aube qu'éclaire encore la lune) / 私にとってつらいものはない (Il n'y a pas pour moi de chose plus triste) / 夜明けほどに (Que le point du jour)」である。「冷たく見えた」(paraissait glaciale) 対象が「Celle」(その人、女性形) すなわち女の様子となっていて、女と逢った歌として訳されている。「有明」を「l'aube」、「暁」を「le point du jour」としている。

(2) は、「私たちの別れ以来 (Depuis notre séparation) / 彼女が私に夜明けの月のように冷たい顔を見せた時の (Où elle me montra un visage froid comme la lune à l'aube) / 私にはつらく思われるものは何もない (Rien ne me semble aussi

百人一首のフランス語訳における夜明けの表現

triste)／早朝ほどに (Que le petit matin)」と、(1) に似た訳となっている。「暁」に該当するのは「le petit matin」で、直訳では「小さい朝」、意識すれば「早朝」となり、この表現からは「暁」よりも「つとめて」のイメージがわく。

(3) はかなり个性的で、「白昼に空に残った月は無情だ (La lune restée en plein jour dans le ciel est impitoyable)／私の断絶以来 (depuis ma rupture)／夜明けのなんと憎いことだ (que l'aube est amère)」である。「有明」が「plein jour」(完全な日中=白昼)となっており、「暁」が「l'aube」である。原歌では「有明」の別れがまずあり、それ以来「暁」がつらいという流れであるが、この訳はそれに逆行するような違和感を覚える。「つれなく見えし」は月のことであり、女と逢ったかどうかについては、「私の断絶以来」(depuis ma rupture)としかないのでわからない。

(4) は、「夜明けの月の冷たい視線の下で私があなたを離れて以来 (Depuis que sous l'œil froid de la lune de l'aube je vous ai quittée)／私は残酷なことを何も知らない (je ne sais rien de cruel)／夜明けほどに (autant que le point du jour)」である。「œil」は「輝き」(古語)とも取れるが、いずれにせよ「つれなく見えし」は月のことである。この訳においても「私があなたから離れた」(je vous ai quittée)とあるものの、確実に女と逢ったとは言い切れない。「有明」と「暁」は(1)と同様である。

Revon 訳と Renondeau 訳は女と逢った後の歌として訳され、両者とも「有明(の月)」は女の様子 of 比喩であるが、ここに実在の月を重ねることもできよう。「有明」と「暁」の相互関係については、Renondeau 訳では「有明」(l'aube)と「暁」(le petit matin)の間に時間の隔たりが感じられ、Nakamura et Ceccatty 訳は時間の隔たりに加え、原歌の流れに逆行する感覚がある。Revon 訳と Sieffert 訳からは時間帯の差異はわからなかった。

## 2-3. 明けぬれば暮るものとは知りながらなほ恨めしき朝ばらけかな (52 番歌)

出典は『後拾遺集』恋二、藤原道信朝臣の歌で「をむなのもとより雪ふり侍りける日かへりてつかはしける」と詞書のついた歌<sup>10)</sup>のすぐ後に続くことから後朝の歌とされ、百人一首歌としてもそのように鑑賞されている。「明け」「暮るる」にも注目したい。

仏 訳	明け	暮るる	朝ぼらけ
(1) Revon Bien que je sache Qu'après l'aurore <u>La nuit</u> aussi reviendra, Cependant, combien detestable Est <u>le point du jour</u> , hélas!	夜明け	夜	夜明け
(2) Nakamura et Ceccatty <u>Un jour qui se lève</u> est <u>un jour qui doit mourir</u> , je le sais, mais Comment sereinement accueillerais-je cette <u>aube</u> ?	昇る日	消える日	夜明け
(3) Sieffert Quand <u>le jour se lève</u> <u>la nuit</u> ne tardera guère j'ai beau le savoir <u>la lueur du point du jour</u> ne m'en est pas moins odieuse	日が昇る	夜	夜明けの光

(1) は、「私はよく知っているのに (Bien que je sache)／夜明けのあとに夜も再び来ることを (Qu'après l'aurore la nuit aussi reviendra)／それにもかかわらず (Cependant)／夜明けがどんなに憎いことか (combien detestable est le point du jour)／ああ (hélas!)」である。「明け」が「l'aurore」、「朝ぼらけ」が「le point du jour」である。

(2) はかなり変形していて、「昇る日は消えなければならない日である (Un jour qui se lève est un jour qui doit mourir)／(それを) 私は知っている (je le sais)／けれどもどのように平静に (mais comment sereinement)／私はこの夜明けを受け入れるのか (accueillerais-je cette aube?)」という疑問形になっている。「明け」は「Un jour qui se lève」、「暮れ」は「un jour qui (doit) mourir」と「jour」の状態を表し、「朝ぼらけ」を「aube」(夜明け)としている。

(3) は、「日が昇る時 (Quand le jour se lève)／夜はほぼ遅れない (la nuit ne tardera guère)／(それを) 私はよく知っているが (j'ai beau le savoir)／夜明けの光 (la lueur du point du jour) は／それでもなお私に憎ませるものなのだ (ne m'en est pas moins odieuse)」である。「明け」は「le jour se lève」(日が昇る)、「朝ぼらけ」には「la lueur」(かすかな光)が添えられている。

この歌は、「明け」=「別れの時」、「暮れ」=「また逢えるとき」であり、「恨めし

百人一首のフランス語訳における夜明けの表現

き朝ぼらけ」は「別れの時」であるから、「朝ぼらけ」=「明け」という解釈が成り立つ。即ち、Revon 訳の「朝ぼらけ」は「l'aurore」の時間と重なり、Nakamura et Ceccatty 訳の「朝ぼらけ」(aube) よりも明るい情景となる。Sieffert 訳には「la lueur」(かすかな光) が加わるが、色の彩度はわからない。

### 3. 叙景歌における「夜明け」

#### 3-1. 朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪 (31 番歌)

恋歌に続いて叙景歌を考察する。まずは坂上是則歌である。出典は『古今集』冬、詞書に「やまとのくににまかれりけるときに、雪のふりけるを見てよめる」とある。30 番歌の「有明」+「暁」同様、この歌も「有明」+「朝ぼらけ」と朝の情景を表す語が重なっている。この歌の「有明の月」は「白雪」の比喩である。

仏 訳	朝ぼらけ	有明の月	降れる白雪
(1) Revon 訳 Au <u>point du jour</u> , Paraissant aux yeux presque Comme <u>la lune de l'aube</u> , <u>La neige blanche tombe</u> Sur le village de Yoshino	夜明け	夜明けの月	白い雪が降る
(2) Nakamura et Ceccatty 訳 Blanche et confondue aux <u>lueurs de</u> <u>l'aube</u> et de <u>la lune attardée</u> Sur les campagnes de yoshino <u>la neige tombe.</u>	夜明けの光	遅れた月	雪が降る
(3) Sieffert 訳 Ce que j'avais pris pour <u>la lune du point du jour</u> à <u>la lueur de l'aube</u> au séjour de Yoshino était <u>neige immaculée</u>	夜明けの光	夜明けの月	無垢な雪

(1) は、「夜明けに (Au point du jour) / ほとんど夜明けの月のように目には見えながら (Paraissant aux yeux presque comme la lune de l'aube) / 白い雪が降る (La neige blanche tombe) / 吉野の村に (Sur le village de Yoshino)」である。「朝ぼらけ」が「point de jour」、「有明」が「l'aube」である。「aube」に内包される白の色彩 (第 1 節参照) が白雪 (La neige blanche) に重なる。



(2) は、「白い (Blanche)／そして混同する (et confondue)／夜明けの薄明りと遅れた月の光に (aux lueurs de l'aube et de la lune attardée)／吉野の里の上に／(Sur les campagnes de yoshino)／雪が降る (la neige tombe)」である。「aux lueurs de l'aube et de la lune attardée」の部分は、「aux lueurs」が「l'aube」と「la lune attardée」の両方にかかると考え、「la lueur de l'aube」(夜明けのかすかな光＝朝ぼらけ)＋「la lueur de la lune attardée」(遅れた月の光＝有明の月)と分解して解釈した。雪の白さは冒頭の「Blanche」で強調されている。

(3) は、「私が夜明けの月と取り違えたもの (Ce que j'avais pris pour la lune du point du jour)／夜明けのほのかな光の中で (à la lueur de l'aube)／吉野の宿で (au séjour de Yoshino)／(それは) 真っ白な雪だった (était neige immaculée)」である。「朝ぼらけ」は(2)と同様の「la lueur de l'aube」、「有明」は「point du jour」である。「白雪」が「neige immaculée」(けがれのない無垢な雪)で、「降る」の動詞はない。

この歌の訳では、Nakamura et Ceccatty 訳及び Sieffert 訳において「lueur」が付加され、光の存在が強調されている。雪の「白」を認識するためには光が不可欠であると考えれば得心が行く。そしてそれは「aube」の時間帯の光であるから、ほのかな白い光である。

なお、「降れる」の部分が日本語では時として「降り積もっている」と現代語訳されているが、仏訳の視線は「降る」(tombe) 雪にあることを指摘しておく。

### 3-2. 朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれわたる瀬々の網代木 (64 番歌)

引き続き「朝ぼらけ」の歌を見る。『千載集』冬を出典とする権中納言定頼の歌で、霧が晴れることにより宇治川の景色がだんだん見えてくるという叙景歌である。

仏 訳	朝ぼらけ	あらはれわたる
(1) Revon Au <u>point du jour</u> , Le brouillard de la rivière d'Ouji [S'élevant] peu à peu, Les montants des claies des bas-fonds S'étendent, <u>dévoilés</u> !	夜明け	あらわになる
(2) Renondeau Au <u>point du jour</u> Sur la rivière d'Uji le brouillard Peu à peu se déchire Et <u>découvre</u> les pieux Des claies de pêche sur les bas-fonds.	夜明け	姿を現す
(3) Nakamura et Ceccatty Quand <u>la nuit se grise et meurt</u> , les brumes de la rivière d'Uji se dissipent Et <u>découvrent</u> dans leurs clartés évaporées les pôles des filets du gué.	夜が酔って 消える	姿を現す
(4) Sieffert Aux <u>lueurs de l'aube</u> sur la rivière d'Uji lambeaux de brouillard <u>laissent voir</u> ici ou là les claies qui barrent son cours	夜明けの光	見せる

(1) は、「夜明けに (Au point du jour) / 宇治の川の霧が [上がって] (Le brouillard de la rivière d'Ouji [S'élevant]) / 少しずつ (peu à peu) / 浅瀬の棚の柱が広がり (Les montants des claies des bas-fonds s'étendent) / あらわになる (dévoilés)」で、「朝ぼらけ」は「point du jour」である。

(2) は、「夜明けに (Au point du jour) / 宇治の川の上に (Sur la rivière d'Uji) / 霧が少しずつ引き裂かれ (le brouillard Peu à peu se déchire) / そして姿を現す (Et découvre) / 漁場の棚の杭 (les pieux des claies de pêche) が / 浅瀬の上に (sur les bas-fonds)」と (1) に似た訳である。

(3) は独創的で、「夜が酔って消えるとき (Quand la nuit se grise et meurt) / 宇治の川の霧は晴れ (les brumes de la rivière d'Uji se dissipent) / そして姿を現す (Et découvrent) / (霧の) 蒸発した明るさの中に (dans leurs clartés évaporées) / 浅瀬の網の極 (les pôles des filets du gué) が」である。「朝ぼらけ」が「la nuit se grise et meurt」(se grise は「灰色になる」とも解せる) と、夜が終わ

る時に変形している。夜が終わって明るさ (clartés) が加わる設定である。

(4) は、「夜明けの光の中に (Aux lueurs de l'aube) / 宇治の川の上に (sur la rivière d'Uji) / 霧の断片 (lambeaux de brouillard) が / 見せてくれる (laissent voir) / ここかしこに (ici ou là) / 流れをふさぐ柵 (les claies qui barrent son cours) を」で、「朝ぼらけ」は「lueurs de l'aube」である。

4種の訳にはすべて視覚表現（「あらわになる」「姿を現す」「見せる」）がある。もとよりこの歌の光景が視覚により捉えられているからだ。「見る」ためには明るさが要請される<sup>11)</sup>。ゆえに、Nakamura et Ceccatty 訳には明確な明るさ (clartés) が、Sieffert 訳にはほのかな明るさ (lueurs) が確認できる。Revon 訳と Renondeau 訳においても、情景を可視化するための明るさは意識されているものと思われる。とすれば、両者の訳においては「point du jour」が明るさを示す表現であると捉えられよう。

### 3-3. ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる (81 番歌)

最後は 81 番歌である。後徳大寺左大臣（藤原実定）の歌で、出典は『千載集』夏、「暁聞郭公」という題で詠まれたことが詞書によりわかる。歌には、「鳴く」という聴覚に「ながむ」という視覚も加わる<sup>12)</sup>。

仏 訳	鳴きつる	ながむれば	有明の月
(1) Revon Quand je <u>regarde</u> Du côté où a <u>chanté</u> Le coucou, Il n'y a plus que <u>la lune</u> De l'aube!	さえずる	見る	夜明けの月
(2) Nakamura et Ceccatty J'ai <u>tourné la tête</u> d'où venait <u>l'appel</u> du coucou Et je n'ai vu que <u>la lune de l'aurore</u> .	呼ぶ	頭を向ける	夜明けの月
(3) Sieffert Dans la direction où le coucou a <u>chanté</u> je n'ai aperçu que <u>la lune demeurée</u> <u>au ciel du point du jour</u>	さえずる	なし	夜明けの空 に残った月

百人一首のフランス語訳における夜明けの表現

(1) は、「私が見るとき (Quand je regarde)／ほととぎすの鳴いた方を (côté où a chanté le coucou)／もう夜明けの月しかない (Il n'y a plus que la lune de l'aube)」で、「有明」は「l'aube」である。

(2) は、「私は頭を向けた (J'ai tourné la tête)／ほととぎすの呼ぶ声のしていた方に (d'où venait l'appel du coucou)／そして私は夜明けの月しか見なかった (Et je n'ai vu que la lune de l'aurore)」となる。「有明」は「l'aurore」である。

(3) は、「ほととぎすの鳴いた方角で (Dans la direction où le coucou a chanté)／私は残った月しか見つけなかった (je n'ai aperçu que la lune demeurée)／夜明けの空に (au ciel du point du jour)」で、「有明」は「point du jour」である。

3種の訳ともに、原歌に則して聴覚表現と視覚表現が共存する。Revon 訳は「chanté」(さえずる)と「regarde」(見る)、Nakamura et Ceccatty 訳は「l'appel」(呼ぶ声)と「vu」(見る)、Sieffert 訳は「chanté」(さえずる)と「aperçu」(見つける)である。即ち、少なくともほととぎすの姿を確認できる程度の明るさはあることになる。その明暗の程は、Revon 訳 (l'aube) よりも Nakamura et Ceccatty 訳 (l'aurore) のほうが明るい<sup>5</sup>が、Sieffert 訳の明るさのレベルは不明である。

#### 4. ま と め

以上、「有明」「暁」「朝ぼらけ」を含む百人一首歌を対象として、仏訳を考察した。仏訳におけるそれらの表現を訳者別・キーワード別にまとめると次のごとくである。

語	歌	Revon 訳	Renondeau 訳	Nakamura et Ceccatty 訳	Sieffert 訳
有明	21	l'aube	l'aurore	l'aurore	l'aube
	30	l'aube	l'aube	plein jour	l'aube
	31	l'aube	-	なし	point du jour
	81	l'aube	-	l'aurore.	point du jour
暁	30	le point du jour	le petit matin	l'aube	le point du jour
	31	le point du jour	-	les lueurs de l'aube	la lueur de l'aube
朝ぼらけ	52	le point du jour	-	aube	la lueur du point du jour
	64	le point du jour	le point du jour	la nuit se grise et meurt	les lueurs de l'aube

Revon 訳は「有明」がすべて「l'aube」、「暁」と「朝ぼらけ」が「le point du jour」と明確に分かれるのが特徴であり、表現の固定という点では安定感がある。Nakamura et Ceccatty 訳は個性的な訳が多い中で、「有明」に「l'aurore」を用い、「暁」「朝ぼらけ」を「l'aube」とする傾向にある。Sieffert 訳は「l'aurore」は用いておらず、「朝ぼらけ」に「lueur」（かすかな光）を加えることにこだわりが見える。Sieffert 訳は同じ語の訳に「l'aube」と「point du jour」が混在するが、これには音節の問題が関わっているものと考えられる<sup>13)</sup>。Renondeau 訳はすべて違った表現を用いていた。

今回は「有明」「暁」「朝ぼらけ」に絞ったが、52 番歌に見た「明く」という語も百人一首に何首も見られる。今後それらについても夜明け表現として追究したい。

## 注

- 1) これらの語については、小林賢章『アカツキの研究——平安人の時間』（和泉書院 2003）、徳原茂実『百人一首の研究』（和泉書院 2015）、吉海直人『『源氏物語』「後朝の別れ」を読む』など、日本語学や日本文学の研究の場において、その指し示す時間帯や明るさ（暗さ）といった観点からの様々な論考がある。本稿でも「時間の先後」や「明暗」について触れるが、フランス語表現からわかることを述べるにとどめる。
- 2) Revon Michel 『ANTHOLOGIE DE LA LITTÉRATURE JAPONAISE』（Delagrave 1910）
- 3) G. Renondeau 『Anhologie de la poésie japonaise classique』（Gallimard 1971）
- 4) Ryoji Nakamura et René de Ceccatty 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』（Edition Philippe 2005）※ 『MILLE ANS DE LITTÉRATURE JAPONAISE』（édition de la Différence 1982）の第3版
- 5) René Sieffert 『De ceent poètes un poème』（Publications Orientalistes de France 1993）
- 6) 『Le Grand Robert de la langue française : du dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française』（Paris : Dictionnaires Le Robert, 2001）
- 7) 鳥津忠夫訳注『新版 百人一首』（角川ソフィア文庫 2001）では、定家の主張する「月來說」と契沖の「一夜説」を挙げたうえで、『百人一首』の解釈としては「月來說」を取るべきだとする（pp. 54-55）。
- 8) 「viens」は動詞「venir」の一人称単数の活用形。「venir」は本来「来る」であるが、

## 百人一首のフランス語訳における夜明けの表現

原歌との「来む」と同様に状況に応じて「行く」となる。(2) Renondeau 訳の「viens」、(4) Sieffert 訳の「viendrai」も同じ。

- 9) 『古今集』においては、その配列から「逢えぬままに過ごした」歌とされ、「つれなく見えし」は「月」と解釈される。百人一首歌としては、鳥津は「あかぬ別れに泣き別れた」と後朝の歌として捉え、別れの後の月がつれなく感じられたとしている（前掲書 p. 72）。鈴木日出男・山口慎一・依田泰『原色小倉百人一首』（文英堂 2002）においても後朝の歌と捉えており、「つれなく見えし」については月と女の態度の両方に重なると述べられている（p. 43）。
- 10) 「かへるさの道やはかはるかはらねどくるにまどふけさのあは雪」（後拾遺集 671）。
- 11) 徳原茂実『百人一首の研究』（和泉書院 2015）において、眺望を妨げていた霧は闇の中では知覚されず、夜が明けた後に霧が目映るのだと指摘し、霧を認識できる明るさの必要性を説いている（p. 190）。
- 12) 「ながむ」には「もの思いにふける」意もあるが、鳥津はその説をとらないとする（前掲書 p. 174）。鈴木・山口・依田も「即座に反応するように、声のした方角をながめてみると」と「見る」の意で解釈し、「「ながむれば」を境にして上二句の聴覚から下二句の視覚へとなめらかに転じている」と述べる（前掲書 p. 102）。なお、吉海直人は、この歌の暗さ（明るさ）を論じる観点から詞書の「聞」を重視している（『「百人一首」の「暁」考』（『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第 13 号 同志社女子大学 2013. 3） p. 3）。
- 13) Sieffert は和歌の持つ 5-7-5-7-7 の音を重視する訳者である。詳細については、拙稿「百人一首のフランス語訳に関する一考察 ——「もみち」の歌を対象として——」（『同志社女子大学大学院 文学研究科紀要』第 18 号 同志社女子大学 2018. 3）参照。

## 付記

本稿を成すにあたり、フランス語訳の解釈について京都フランス語教室游藝舎の先生方から助言をいただいた。厚く御礼申し上げます。